

富士見市の坂

富士見市は、標高20m前後の「武蔵野台地」と標高6m前後の「荒川低地」という高低二面からなる地形要素からなっています。

そして、富士見市域の「武蔵野台地」は、大きく三分区されます。これは台地を穿孔し、南西から北東に流向する小河川（北から砂川堀、富士見江川、柳瀬川）によって分断された台地が、それぞれ独立した小台地に細分されたためです。

- ・砂川堀以北の小台地が勝瀬地区の載る「勝瀬支台」
- ・砂川堀と富士見江川間の小台地は旧鶴馬地区の載る「鶴馬支台」
- ・富士見江川と柳瀬川間の小台地は水子地区を載せる「水子支台」



「勝瀬支台」

勝瀬支台は西から東へゆるやかに海拔高度を減じ、支台東縁部は荒川低地に対して急な崖を作らず、台地と低地の境界は非常に不明瞭です。

勝瀬支台の海拔高度は、国道254号線と東上線の間で20mを越し、その後、高度10mまでは、緩やかな傾斜面を構成しています。

「鶴馬支台」

鶴馬支台は北側の砂川堀と南側の富士見江川に挟まれた台地で、富士見江川の支流である唐沢、権平川なども含め、穿孔河川は武蔵野台地の東縁部を複雑に開析して起伏に富んだ地形を形成しています。

高度20mの線は台地上の縁近く走り、10mの線は台地の裾を縁取るように巡っていて、台地から低地に移るところには各所に急坂があり、現在では緩やかに改良されている所が多い。支台の大きさは、東西2.4km、南北2.1km。

【地図A】 ①ギンバ坂・銀馬喰坂 ②観音坂・お観音の坂

【地図B】 ③尻ったれ坂 ④土橋の坂 ⑤関沢の坂 ⑥油坂（水子支台）

「水子支台」

水子支台は鶴馬支台の南に続く一連の台地で、富士見江川によって分けられています。東側は荒川低地を臨み、台地の下を新河岸川が流れ、南側は柳瀬川の開析した広い低地によって区切られています。

海拔20mの線は台地上の縁近くを通りこれより東方に高度10mの線がほぼ台地の輪郭に沿って巡っていて、三方の低地に向っては、いずれも急傾斜で落ち込み各所に坂道があります。支台の大きさは、東西2.6km、南北1.5km。

【地図C】 ⑦般若院の坂 ⑧松の木坂 ⑨岡の坂

【地図D】 ⑩山王坂 ⑪堂山の坂



上記の支台の特徴から、富士見市には多くの坂が生まれていると考えられ、また、昔は村名、字名があるのは一部の居住地域に限られていた面もあり、村内を訪ねるときの目印（住所のかわり）としての地名が坂だったと考えられます。したがって、多くの坂が個性的な坂名や別名を持っているようです。

ここに取り上げた坂名は、「郷土富士見検定問題集」、「ふじみの伝説・昔ばなし」、「富士見市史」、「ふじみ広報」などで名前が出ているものです。そして多くの説明文は、「**富士見市資料館友の会 ふるさと探訪部会**」が作成しました『**ふじみの坂**』（冊子）から引用しています。その冊子には28ヶの坂名が説明されています。

【地図A】



① ギンバ坂・ギンパ坂・銀馬喰坂

県道ふじみ野～朝霞線、上沢2丁目交差点（信号）から苗間の弁天橋に通じる道である。明治の終わりの頃には、大井町に下る道は、この坂だったため広く利用されたという。坂は急坂で近くに馬を引く馬喰をしていた銀八さんがいたので、地元では銀八さんにちなんで「ギンパ坂」、少し離れたところでは「銀馬喰」、「ギンバ坂」と呼んだ。

また一説によると、銀八さんが前歯を殆ど銀歯にしていたため「ギンバ坂」と呼んだという。

また一説には、昔この坂を行き交う時、西方の湿地帯に夕日がさすと、稲穂の波が銀色に光って見えたのでこの坂道を「銀波坂」という。



<下る道>



<上る道>

富士見市ホームページ「観る・楽しむ・学ぶ」⇒「市内のみどころ」⇒
歴史探訪『ふじみ・発見!』No. 19…「富士見市内の坂」より「ギンバ坂」貼付

ギンバ坂

上沢の交差点からふじみ野市苗間方向に向かって下る坂道のことを「ギンバ坂」または「ギンバ坂」といいます。現在では緩やかな傾斜ですが、県道になる以前は急な坂道でした。この坂の近くで馬喰(牛馬の売買・仲介をする人)をしていた「銀八さん」の名前にちなんで地元ではこの名で呼ばれていたそうです。



② 観音坂・お観音の坂

鶴瀬小学校から北に向かう道で台地から勝瀬低地へ移るところは急坂であった。坂の上に「渡戸観音堂」が建てられているので、「お観音の坂」と呼ばれていたが、いつの間にか「観音坂」と短く呼ばれるようになった。昭和7年～8年(1932～33)にかけて道路改修工事が行われ、現在の比較的なだらかな坂に変わった。坂の傍らには、道路改修工事「竣工記念」の碑が建ち工事請負者はもとより、鶴馬村青年団の多くの勤労奉仕があったことがわかる。

「ウエルシア」駐車場の道路側 ⇒





<下る道>



<上る道>



③ 尻たれ坂・宮坂

下鶴馬（下郷）の氷川神社から富士見台中に下る坂である。坂の右崖上に神社があるので『宮坂』と呼ばれた。この坂は南畑方面から鶴瀬駅へ、そして三芳、所沢方面に通じる唯一の道幅の広い県道（現三芳～富士見線）であった。かつては所沢と大宮間の乗合バスが、1日3本通った貴重な交通路であった。近くには水車屋の「御庵」の横田家があり、南畑の人たちが精米にするために通った道でもあった。

また、この坂を「尻たれ坂」と呼ぶのは、南畑方面から荷物や俵を積んだ牛車・手車で登るのは容易ではなく、尻がたれさがるようで、後押しが必要であったからだという。



<下る道>



<上る道>

富士見市ホームページ「観る・楽しむ・学ぶ」⇒「市内のみどころ」⇒
歴史探訪『ふじみ・発見!』No. 19…「富士見市内の坂」より「尻たれ坂」貼付

尻たれ坂

下鶴馬の氷川神社から富士見台中学校へ向かって下る坂道のことをいいます。南畑方面から鶴瀬駅へ牛車や手車で荷物を積んで坂を登るのが困難で、尻が垂れ下がるようで登れないほどであったことから、こう呼ばれるようになったといえます。また坂の上に氷川神社が位置していることから「宮坂」とも呼ばれています。

ほかにも市内には多くの坂があり、その名前からも人々の生活と密接につながっていたことがわかります。名前の由来について考えながら歩いてみると坂道も楽しめるのではないのでしょうか。



④ 土橋の坂・万兵衛坂

鶴瀬東通線と交差する県道ふじみ野～朝霞線、「鶴瀬駅前」の信号から谷津の森（横田医院）の前を経て道路下を流れる権平川に至る坂である。昔、権平川には土橋が架かっており、その西側に土橋（つつ橋）という屋号の家（横田家）があるので「土橋の坂」と呼んでいた。また東側には万兵衛という馬車を引く馬方が住んでいた。他の人では扱えない暴れ馬を上手く扱うので有名であったことから、その名前をとって「万兵衛坂」とも呼ばれた。



<下る道>



<上る道>

富士見市ホームページ「観る・楽しむ・学ぶ」⇒「市内のみどころ」⇒
歴史探訪『ふじみ・発見!』No. 19…「富士見市内の坂」より「土橋坂」貼付

土橋坂(つちはしさか)



鶴瀬駅前交差点から谷津の森の西側を通る県道の緩やかな坂道のことをいいます。坂の下を流れる権平川にかかる土橋へと通じる坂ということで「土橋の坂」と呼ばれていました。また、坂道の中腹に馬車を引く馬方の仕事をしてきた「万兵衛」という人が住んでおり、暴れ馬を上手に扱うことで有名だったことから「万兵衛坂」とも呼ばれました。

⑤ 関沢の坂

県道ふじみ野～朝霞線の旧道で消防団第三分団の建物脇の台地から大きく湾曲しながら江川に架かる「あすなろ橋」に至る急坂である。以前は狭い林の中の坂で木が鬱蒼と茂っていた。しかも砂利道で、昭和35、36年頃まで、この坂を鶴瀬～志木間の路線バスが通っていたという。また、旧江戸道でもありました。

坂下の尾崎家敷地内に湧水があり、U字溝から江川に注いでいる。



<下る道>



<上る道>

⑥油坂

山崎公園の正面入口の道を本郷方面へ向う坂である。この坂を上りきったあたりの左側に金子家がある。金子家は昔、農業の傍ら油屋を商っていたことから、地元の人々は、この坂を「油坂」と呼んでいた。なお、旧金子家の母屋は明治4年（1871）建築の茅葺住宅であったが、現在、富士見市に寄贈され市指定文化財として難波田城公園に移設、保存されている。また、山崎公園そばを流れる江川に架かる橋も「油橋」と呼ばれている。



<下る道>



<上る道>

⑧松の木坂・松見坂・伊勢屋の坂

新河岸川舟運の山下河岸に下る坂は、鎌倉道で南に通じていた松の木坂という。大きな松が繁っていたのでそう呼ばれた。昔、源義家が奥州征伐の途中ここに陣を構えたとき、大きな蛍が数多く現われ、軍を慰めたという。下南畑の木染側では「松見坂」と呼んでいた。また、坂下に伊勢屋という屋号の家があり「伊勢屋の坂」とも呼ばれた。



<下る道>



<上る道>

⑨岡の坂

県道ふじみ野～朝霞線の水子から志木に向う道で、城の下を通り浦和バイパスと交差する坂である。江戸期には坂の名称であったものが、やがて明治期には字名にもなった。



<下る道>



<上る道>

【地図D】



⑩山王坂

正網氷川神社から柳瀬川に架かる富士見橋に向う坂で、浦所バイパスと交差する坂である。

昔、山王神社があったことから頭文字をとって命名されたが、この神社は明治時代に正網氷川神社に合祀された。氷川神社付近の坂は「宮坂」と呼ばれることが多いが、ここは「山王神社」の名前を使っている。

また、この道は古くは「江戸道」と呼ばれ近くの鎌倉道と交差する角には「山王坂地蔵」が建っている。

鎌倉道と交差する角に建つ「山王坂地藏」 ⇒



<下る道>



<上る道>

⑪堂山坂

針ヶ谷小学校から浦所バイパスに通じる坂道「堂山坂」という。

昔、坂の下まで柳瀬川が流れていたとき、大蛇の洞が流れつき、洞塚を築いて葬ったので「洞坂」と呼んだが、後に「堂山」と書くようになったという。この話は柳瀬川流域の志木、新座、針ヶ谷あたりに伝わっている伝説で、平安時代に、この一帯を支配していた藤原長勝は広大な大蛇ヶ淵を水田に変えようとしたが大蛇の怒りに触れて工事は失敗してしまった。そこで不動明王の助けをかりて大蛇の首を刎ねることができた。胴体は針ヶ谷の流れに着き、首は下流の長勝の館（現、志木第三小付近）の裏で発見されたので、祠を建て「首弁天（かしらべんてん）」と名付けて吊ったという。



< 下る道 >



< 上る道 >

記載日：2014/1/19

この内容は、「富士見市史」、「ふじみの伝説・昔ばなし」、「郷土富士見検定問題集」、「郷土富士見検定問題集 第二集」、「ふじみ広報」、ふるさと探訪部会作成の「ふじみの坂」から抜粋し、引用させて頂いております。